

春のシンポジウム「大学独立行政法人化とは何か」ご案内 p.02
総会と研究発表会のお知らせ（発表者募集） p.02

特集：遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議

市民の立場を尊重することで、共に咲く喜び、を感じることができるか 前島 修 p.03

コンセンサス会議に「説明者」として参加して 藤垣裕子 p.04
観戦記 平川秀幸 p.05

一高校理科教員にとってのSTS 八巻俊憲 p.08

STS情報 p.10

NEWS LETTER

2000 Vol.11 No.3

STS NETWORK JAPAN

STSは、Science, Technology, and Society の略称です

STS Network Japan 2001 春のシンポジウムのお知らせ

「大学独立行政法人化とは何か」

この十年、様々な立場から大学の危機と改革の必要性が叫ばれてきました。中でも国立大学の独立行政法人化は、1998年に浮上して以降、急速に議論の焦点となってきました。そしてその後の流れにおいて、これまで反対の立場と見られていた文部省が姿勢を変え独立行政法人化についての方針を明確に示すに至ったことにより、それが避けがたいものになったと認識する状況が生まれつつあります。

しかし、独立行政法人としての大学像に対し、具体的で明確な展望がどれだけ打ち出されているのでしょうか。確かに、これまで楽観論、悲観論が様々な立場から唱えられてきました。ですが、それらの議論が十分に互いを認識し、噛み合った形でなされてきたとは言い難い状況です。そこでSTS Network Japanでは、いわゆる賛成派、批判派からその二極には分類しきれない視点まで、様々な議論が会いぶつかり合う場を設定したいとの気持ちから、本シンポジウムを企画いたしました。

大学の独立行政法人化という問題は、まさにその問題の広さ、複雑さゆえにSTS的であるといえるでしょう。行政、産業界、大学関係者、それ以外の市民など、それぞれの立場の相違のみならず、例えば大学内部においても「売れる分野」（IT関連分野などでのイノベーションを次々と繰り出せる分野など）と、直接市場を意識するのは困難な分野（大半の人文系など）の存在などがあります。本シンポジウムが、文字通り異分野横断的なこの問題に関する公共的な対話の空間となり、21世紀の大学像について大いに考える良い契機を提供出来ればと思います。

パネリスト、コメンテーター（交渉中を含む）：

小澤弘明（千葉大学文学部）、澤昭裕（経済産業省経済産業研究所）、益田隆司（電気通信大学電気通信学部）、大内裕和（松山大学人文学部）、榎木英介（神戸大学医学部）、小林信一（筑波大学大学研究センター、科学技術政策研究所）

日時：2001年3月31日（土）13：00～17：30（開場12：30）

会場：東京大学先端科学技術研究センター新4号館2階講堂

（小田急線・東北沢駅より徒歩7分、井の頭線・駒場東大前より徒歩10分）

* 事前の参加費・申し込み等は不要です

2001年度総会と研究発表会のお知らせ

日時：2001年4月1日（日）（総会、研究発表会とも）

※詳しい時間割は次号のニューズレターでお知らせします。

会場：東京大学先端科学技術研究センター新4号館2階講堂

（小田急線・東北沢駅より徒歩7分、井の頭線・駒場東大前より徒歩10分）

◆STS Network Japan 2001年度研究発表会の発表者を募集しております。

ご希望の方は、2月28日までに、事務局までお申し込みください。

発表時間は30分程度とします。

OHP、スライド、プロジェクターなどをご利用のかたは事前に申し込んでください。

予稿集は発行しませんが、当日までにA4で1～3枚程度の講演要旨（書式は問いません）を提出してください。

特集

遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議

【市民パネルから】

◆市民の立場を尊重することで、共に咲く喜び、を感じることができるか

前島 修（市民パネル）

市民パネラーとして『遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議』に参加する機会を得、今回、会議を終えての感想をNews Letterに執筆する場を与えて頂いた。コンセンサス会議についてまだまだ認識不足の私ではあるが、一方ではありふれた参加レポートに終わらせたくないという気持ちもあり、市民の立場から何らかの問題提起ができればと願っている。市民の存在についてや現在の自分の職業と市民との関係、今後のSTSに期待することなどを自由に述べてみたい。

理系人間、文系人間というのがあるらしいが、そんなものは存在しない、と私は密かに信じている。あるとすれば、本人がそう思い込んでいるだけのことであろう。

このあたりから市民の定義について考えてみることにする。

科学技術への市民参加という言葉を目にしたとき、初め、文系人間の理系参加を思った。私自身は理工系の大学院を修了しているのだから、傍から見れば理系人間になるのかもしれない。しかしながら、一度として私は、自分が理系人間であるという立場を意識したことはない。それでも敢えてここでは自分を理系人間とするならば、科学技術への市民参加において理系人間は何をすればよいのだろうか、と考えてしまう。

仮に、科学技術の先端にいる人々を理系人間としたとき、素人の存在は多分に文系人間を指すことになるだろうから、素人を市民と置き換えてみる。このとき、市民＝文系人間か、と問われれば、何か違和感が残るのである。市民、には何かもっと別の重要な意味が込められているように思えてくる。

市民、を何ものをも失うことのない存在だとすれば、そこには、たったひとりの人間としての尊厳が揺るぎなく立ちただかっているのみである。市民とはいかなる存在か、とコンセンサス会議を終えてからも、しばしばそのことについて考えている。

会議中、私は自分が市民であるということを再認識し、また、はじめて強く意識することで市民、を十分に謳歌することができた。市民パネラーにこのうえない喜びと自由を感じ、そこに何の束縛も制約も受けることのない、自由な存在としての自分、を認めることができたのである。その状態から発せられた言葉は一体何を意味するのか――。

会議以降の私の思考パターンとして、市民とは何か、について考えることは同時に専門家の果たす役割について思

いを巡らすことにもなった。そうして、いつもひとりの人物のことが思い起こされてくるのだ。

昨年お亡くなりになられた高木仁三郎氏は、原子核化学の専門家でありながら市民でもある、ということにこだわり続けた人である。ふたつの立場を同時に追求する過程において相当に苦勞されたようである。その一連の活動記録が科学・技術と社会との関わり方の難しさを如実に物語っているのは言うまでもないが、それでも市民との関わりについて模索され、最終的には市民科学者、の立場に辿り着かれた。市民科学者・高木仁三郎の発言とはいかなるものだったのか、と先程の自分の思いとも関連づけて考えてみるのだが、なかなか答えは見つからない。

現在、建設コンサルタントとして社会資本整備に携わっている私にとって、市民科学者・高木仁三郎という存在はたいへん興味深いものがある。というのも、土木技術者は、市民のための技術者として長期にわたり社会資本の整備に貢献してきていながら、日本では市民のための技術者として認められて来なかったからである。欧米などでは、Civil Engineerはその名の通り市民技術者として社会に認められ、その社会的地位もかなり高いとされている。しかしながら、日本ではご存知のようにこの有り様である。

高木仁三郎氏の活動からも見られるように、市民のため、という立場が日本ではあまり歓迎されない背景にその要因があるのかも知れない。未だきちんと論じられていないが、市民と科学技術との関係に、建設コンサルタントの立場から関わってみると見過ぎすことの出来ない事実であり、日本の社会を理解するうえで重要な何かは隠されているようにも思えてくる。

「志というのは、単に思い入れとか願望ではなく、その人の全人格を賭けて具体的な実践への契機を持ってほとぼしる意志でなくてはならないだろう。真の批判とは、批判的分析・否定を通り抜けて、最終的には創造へと飛翔すべきものである。」と言った、市民科学者・高木仁三郎の言葉を見習って、今は市民技術者になるべく社会、に貢献していきたいと思っている。

いま、主役は市民である。地球全体が市民科学者になれることができるかどうかはひとつの大きなテーマだろう。建設コンサルタントは本当の意味で、市民のための技術者となれるように、より一層科学技術への正しい理解が求められてくることと思われる。

ここで少し、私がテクノロジー・アセスメントに関心を持つようになった経緯について述べてみたい。

建設業界のなかに技術評価を必要とする問題がたいへん多く集約されていることや、高木仁三郎氏の活動に刺激を受けたことも切っ掛けとしてあるが、それ以前に私自身が社会、をより強く意識するようになっていたことが最大の理由として挙げられる。

共に咲く喜び、という武者小路実篤の書が実家にある

が、私は成人を過ぎたある時から「共に咲く」という言葉に「運命共同体」をみたのである。そして実篤の書から想起される広い世界観を知ったのだ。それまでの私は血縁関係で結ばれている親兄弟や親戚、学校で知り合った友人達だけで自分の世界を創ってきた。しかしながら、例えば、私の先祖であっても、私と「共に咲く」ことはできなかった、という紛れもない事実を素直に認めたとき、それまで遠くに感じていた他人が急に身近に感じられるようになってきたのだ。そのとき、いま「同じ時代を生きる人々」と「喜び」を感じてみたいと思ったのである。しかし、何に「喜び」を見出すのか。果たして、この時代において「共に咲く喜び」など感じるものがそもそも可能なのだろうか、と不安に思えてきたのである。

その後、科学技術への市民参加にひとつの希望を見出し、Science, Technology and Societyはそのためにあり、またSTSとはそういうものだとして理解した。二十一世紀は市民が運命共同体としての活動を意識することで、人間はもう少しまとまるとはなれるのではないかと思っている。

「結局、最後のところは、やはり〈他力〉ということなんでしょう」と、作家・五木寛之は『他力』のなかで語っているが、この『他力思想』や『ルパーク・シェルドレイクの仮説』、『ミーム学』といった目には見えないが確かに存在し、精神文化を形成するのに何らかのかたちで関与しているものにも踏み込んでみて、社会的合意形成というものを考えていって頂ければと思う。科学・技術と社会との関わり方について論じるにあたり、さらに深みが増すのではあるまいか。

コンセンサス会議に限って言えば、今後の取り組みとしてデンマーク式という服に合わせるか、日本式という着たい服を探していくかのいずれかであろう。私は後者の方に期待しているが、市民パネラーはまず、頭をからっぽにして参加すべきだと思う。何も知らないことを武器として、初歩的な質問を専門家達にぶつければいい。なぜその技術を開発する必要があるのか、と。実は当たり前に見える事を説明するのが、本当は最も難しいということを専門家自身がよく知っているのだから。

年末から年始にかけて、二十一世紀の展望といった特集記事が新聞に数多く掲載された。大臣に聞く、とか、各界著名人の対談集など、どれも立派な〈読み物〉だった。ここで〈〉を付けて〈読み物〉としたのは、まだ何も実現はしていませんよ、という皮肉を込めた気持ちを何らかの形で表現しておきたかったからである。

専門家とは所詮そのようなものである。

話し手の心に二十世紀の反省のようなものが色濃く漂っており、二十一世紀に向けての力強いメッセージを感じることはできなかった。あらゆる分野における抜本的な改革の必要性が、教育・政治・経済を軸に展開されていた。そのなかでとりわけ、ひとりの人間としての生き方を論じ「農」に注目したもの、IT革命について、単に数値や統計を知らせるものではない、「情報」とは基本的には人間の情を伝えるものである、といったコメントが新鮮であった。

コンセンサス会議は単に市民参加のツールである、との

認識しか持ち合わせていないが、いま、コンセンサス会議を推進していききたいという私の気持ちの根源には、IT革命に反抗しての人間と人間との会話によるコミュニケーションの推奨のようなものがあるのかもしれない。

「農」や「情」という、どちらもアナログ回帰を思わせる言葉が印象に残ったことで「人間はアナログの存在である」といった無言の主張が私の中にあることを発見した。私は、テクノロジー・アセスメントに関して、きちんと体系的に勉強したわけではない。今後もおそらくそれをしないだろう。コンセンサス会議に参加して、市民の立場を大切にしていきたいと思ったからであり、市民の立場からしか本当に求められているものは見えてこないと感じたからである。

いずれにせよ、自分の人生を二十一世紀に託すことになる。市民の立場を主張し続けることで世の中がどのように変わっていくのかをScience, Technology and Societyに注目しながら静かに見守っていききたい。

[「専門家」から]

◆コンセンサス会議に「説明者」として参加して

(注！「専門家パネル」ではありません)

藤垣裕子 (東京大学)

今秋、日本における3回目のコンセンサス会議が農林水産省主催の形で開催された。プロセスの詳細については、<http://web.staff.or.jp> すでに公開されているので、ここでは9月23日につくばにおいて「説明者」として「リスク論、安全学の視点から」という講演をおこなった参加記を記す。

<準備プロセス>

まず講演準備で困ったこと。コンセンサス会議に資料を作るにあたって、ファシリテータである小林傳司さんからもらった言葉は、「(市民パネルは基本的に本当に素人の方々ですから、こみいった議論をせず)、われわれの世界での議論における正確さを犠牲にしても、できるかぎりわかりやすく」というものであった。今回のコンセンサス会議をまとめる上で、ファシリテータである小林さんの苦勞と努力は相当のものであったと拝察するが、その小林さんによるこの注文には頭を抱えた。STSの専門性はまだ構築途中であり、「われわれの世界での議論における正確さ」でさえ、まだ構築途中であるのに、それを「わかりやすく」説明することのしんどさ、を実感したためである。私は、現在の職場である東京大学総合文化研究科(駒場)においてSTSの専門性を同僚(つまり科学者)に納得させることと同時に、媒介の専門家としての語彙を市民にわかりやすく説明することが求められ、双方の要求水準の方向の違いの認識と両立の難しさに直面した。科学者が最先端の研究

を「わかりやすく」説明しろ、と言われて躊躇する気持ちがよくわかるような気がする。

<当日>

さて、このようなしんどい作業をへて、当日を迎えたわけであるが、当日（9月23日）は、科学者サイド側（推進側）の人数が圧倒的に多いスタッフ構成で、社会科学サイドからの参加である林真理氏と私にはかなりのプレッシャーであった。しかしプレゼンテーションは、市民パネルに好評だった。「聞いてて元気がでた」「リスクと責任論はとても刺激的だった」などの感想のほか、市民パネルから、総合討議で使えそうな、かなり本質的な意見がでてきた。とくに年配の女性から「レーチェルカーソン等の例に見られる科学への警告と、次世代への責任」についてのコメントをひきだせたことは、かなりの成功であったと思われる。このようなコメントが自分の口からできるようになれば、あるていど科学者など専門家に対しても、堂々と市民の意見をぶつけることができる。at Citizens' Panel's Risk「市民パネルの責任において」報告書を作成するための1つの動機づけとなったと考える。また、食品疫学への思考を促す「わかりやすい」疫学の資料を作成して臨んだ身としては、専門家への鍵となる質問に「健康への長期的影響の評価」「食物の毒性評価」の項目が入ったのはうれしいことである。

<会議の中立性>

ウィーンでの4S・EASSTジョイント会議の帰りに、空港でハーバード大学のジャサノフ氏（現4S会長）にばったり会い、いくつかの情報交換（今回の4Sの感想、そして来年の4S（ボストン）に何が必要か、秋からの授業に必要なあるトピックに選ぶべき文献、欧州と米国のSTS状況の違い）のついでに、日本の農水省のコンセンサス会議のことを伝えると、「農水省が主催で、コンセンサス会議の独立性が保てるのか」と開口一番に本質をついた質問がでた。たしかに、今回はこのような官庁が主催ということもあり、市民側も、主催者側も疑心暗鬼、という状態が初期にあった。このことによって、われわれ説明者側にもかなりの負担が生じ、おそらく運営委員会にも多大な負担がかかっていたことだろう。2000年秋冬にかけて進行中の科学技術庁主催のコンセンサス会議の運営をめぐっても、さまざまな意見が出されている。情報バイアス、説明者や専門家パネル選択プロセスへのバイアス、市民パネル選択プロセスへのバイアス、コンセンサス作成プロセスに混入するバイアス、そしてそれが利用されるプロセスにおけるバイアス、、、など、主催者によってはさまざまな問題が懸念されるのも事実である。行政からも市民団体からも独立な、第三者機関のようなものが主催できるようになることが望ましいと考えるが、普及プロセスにおいては、主催者ごとの上記バイアスの吟味を徹底して行う必要があるのだろう。

<それでも成果として>

それでも、公表された「市民の考えと提案」のなかに、

次の文章がくりこまれたことは、かなりの成果であると考えられる。「今回のコンセンサス会議で、社会的合意を得るための考え方の手段を社会科学の分野が取り扱うことを知ったが、まだ一般的にあまり馴染みのない考え方ではないかと思う。国は情報を提供するだけでなく、科学技術に関する社会科学的な分析についても啓発の必要があるのではないか。」これは、STSの存在意義を市民パネルが理解し、それをもっと普及させる必要があるという要望を表明しているということである。この部分もふくめて、今回の市民パネルによって公表された提案文書の質は高い。この種のある意味で壮大な社会実験ともいえる市民会議は、実施し、相互学習し、反省点を公表して次に生かすというサイクルをへてこそ、よりよいものになる。この会議の運営にかかわった多くの方々の尽力に敬意を表したいと思う。

[観戦記]

◆「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」について

平川秀幸（京都女子大）

昨年9月から11月にかけて、農林省の外郭団体・(社)農林水産先端技術産業振興センター(STAFF)主催による「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」が開かれた。

この会議では、過去二回の実験的なコンセンサス会議を開いてきたメンバーで、「科学技術への市民参加を考える会(AJCOST)」の代表でもある若松征男氏(東京電機大)、塚原修一氏(国立教育研)が運営委員に加わり、小林傳司氏(南山大)が会議ファシリテーターをつとめた。市民パネルには全国から公募抽選された18名が集まり、数人の専門家からのレクチャーを経て質問書「鍵となる質問」を作成し、これに回答した他の専門家たちと実にホットな議論を展開していた。その主成果である報告書『市民の考えと提案』と、専門家たちのプレゼンテーションなど会議の経緯を伝える資料は、STAFFのホームページ<<http://web.staff.or.jp/>>に公開されている。

筆者は、一般公開された第3回(市民パネルの質問書に対する専門家からの回答と質疑応答)と第4回(報告書『市民の考えと提案』の発表)の会議を傍聴したが、とくに次の3点でこの会議は成功だったのではないかと考えている。

一つは、いわゆる「素人」である一般市民は科学・技術の問題について決して「無知」ではなく、それどころか、個々の個人的・職業的観点から鋭い問題提起を行い、専門家が市民から学ぶことも多いという、STSにおける「一般市民の科学理解(PUS: Public Understanding of Science)」論の基本的洞察が、この会議でも見事に確認された点だ。それは、単に当該の領域の専門的訓練を受けていない「素人」も、専門的議論を十分消化できるというこ

とに留まらず、消費者として、親として、農業生産者として、学生として、それぞれの生活の文脈に根ざした「生きた疑問」を投げかけ、特定の専門領域の視点や利害関心に凝り固まりがちな専門的議論を、より幅広い文脈に位置づけなおす力を誰もが持っていることを示している。

二つめの成功点は、まさにそうしたいわば「問題の拡張的再定義」の一例だ。それは、しばしば自然科学的・工学的問題と捉えられがちな科学・技術のリスク問題について、社会科学的分析がいかに重要であるかを市民パネルが報告書のなかで訴え、これをとくにSTAFF所属の専門家や行政官らと分かちあえたようだったことだ。会議には専門家として、STS業界からは藤垣裕子氏(東京大学)、林真理氏(工学院大学)、また『なぜ遺伝子組み換え作物は開発されたのか』(明石書房)の著者である大塚善樹氏(広島経済大学)、農業経済学から久野秀二氏(北海道大学)が説明や回答を行っているが、市民パネルの間では、彼女・彼らの話がことのほか印象深く開明的だったそうだ。(小林傳司さんによれば、とくに藤垣さんは「ジョディー・フォスター(?)みたいでカッコいい」と大評判だったそうだ。)これを反映して『市民の考えと提案』は次のように締めくくられている。

「国にすべての政策決定を任せきりにすることは、私たちの自己決定権を放棄することになる。また、感情的に反対することは、私たちの意志を政策に反映する上ではマイナス要因でしかない。国・企業・研究者と市民の双方向性のある議論をするために、私たちは問題に関する情報を知るとともに、リスクとベネフィットについて判断する社会科学の考え方をする必要があったと感じた。今回のコンセンサス会議で、社会的合意を得るための考え方の手段を社会科学の分野が取り扱うことを知ったが、まだ一般的にあまり馴染みのない考え方ではないかと思う。国は情報を提供するだけでなく、科学技術に関する社会科学的分析についても啓発の必要があるのではないか。市民一人一人がきちんと考えることが、長い目で見て社会の利益につながる。」

これに対して専門家たちの感想が全体的にどんなものであるかは、市民パネルのものも含めて、これから追跡調査する予定だが、少なくとも会議終了後に直接言葉を交わらせることのできたSTAFFの理事の方から受けた印象や、その後、ファシリテーター役をつとめた小林傳司さんから伺った話では、農業技術関係の専門家にとって社会科学の視点は非常に新鮮で、今後研究していく価値が非常に大きいと受け止められたようである。

ちなみにこの会議で一番印象に残ったのは、実は、この社会科学の視点をめぐって、第3回会議で市民パネルの質問書に回答した社会科学系の専門家と自然科学・工学系の専門家との間で、遺伝子組み換え作物のリスクとベネフィットを論じるには、その技術の開発と利用が行われる社会的文脈—現在のモノカルチャー的で工業的・商業的な農業・食糧システムの構造—を考慮する必要があるかないかをめぐって、非常に明確な意見の分裂があったことであ

る。

なお『市民の考えと提案』は、第4回会議でプレス公表され、朝日・読売・毎日を含めた11月5日付けの新聞各紙で報道されているが、市民パネルが口頭でも報告書でも強調したこの「社会科学の視点の重要性」について触れた記事は一つもなく、また当日の記者からの質問でも一切触れられなかったという事実は、この領域の問題に関するマスメディアの鈍感さを物語るエピソードとして指摘しておきたい。

会議の三つ目の成功点として考えられるのは、今回の会議が、農林水産省の行政としての意思決定に直接連なるものではなく、遺伝子組み換え作物に関する研究開発の文脈に位置づけられていた点だ。行政が開催するこの手の「市民参加型会議」には、原子力部門や公共事業での類似制度に顕著なように、そこでの市民の判断が行政の意思決定の正統性に対する「言質とり」として利用されかねないという懸念が常につきまとう。(実際、この会議でも当初は、市民パネルのあいだでこの懸念が強く、他方、専門家や行政サイドも、「素人」がちゃんと正しい技術評価ができるのかという疑心暗鬼があり、かなり雰囲気はぎすぎすしていたという。)しかし結果的には、今回の会議は、この危険を極力回避したものになっていたと考えられる。80年代半ばにデンマークで開始されたコンセンサス会議は、その後、イギリスやアメリカ、韓国、フランスなどいろいろな国に広がり、若松さんや小林さんらによって、1998年のSTS国際会議での「遺伝子治療」をテーマにした会議や、1999年の高度情報技術をテーマにした会議が実験的に行われている。それらのうちたとえばデンマークの場合には、デンマーク議会の機関であるデンマーク技術委員会(Dunish Board of Technology)によって行われたものであり、(行政府ではないが)立法府という政治的意思決定の場に位置づけられていた。その点で今回の日本の例は、世界的にユニークなものだったといえるのではないだろうか。

とりわけこのユニークさで重要なのは、コンセンサス会議の本質的機能は、その名が示唆する「合意形成」よりは、専門家と非専門家のあいだや専門家同士、非専門家同士のあいだに潜む「隠れた」意見の不一致や、気づかれにくい論点を表に出すことによって、専門家・非専門家を問わず参加者が相互に学びあい、より正統性のある合意形成に必要な適切なアジェンダ・セッティングを可能にすることにこそあるということだ。(参考：小林傳司「"コンセンサス会議"という実験：素人に科学/技術を評価する資格はあるか」、『科学』、1999年3月号)。この点で、コンセンサス会議は、政治的意思決定よりは、研究の文脈に位置づけられたほうが、本来の機能を発揮するといえるのだ。実際、今回の会議では、先に述べた社会科学系と自然科学・工学系のあいだの専門家の意見の不一致だけでなく、遺伝子組み換え作物の安全審査の要である「実質的同等性」という概念についての考え方も、必ずしも専門家同士で完全に一致してはいないという事実が明らかになっている。また市民パネルのうち農家の女性からは、日本モンサントの副社長の方に対し、「遺伝子組み換え作物の藁屑な

どを家畜の食糧にした場合の危険性は調べられているのか」との質問が投げかけられ、これがまだ未解明であることが明らかになり、また今後モンサント社でも調査するという「約束」の言葉を引き出している。

もう一つつけ加えれば、研究の文脈とはいえ、STAFFのような公的研究機関が会議を主催し、その成果を活かすことは、「公的研究機関の役割とは何か」を示唆する点で重要だ。とくに遺伝子組み換え作物の分野は、企業主導・市場原理主導で研究開発と利用がすすめられている分野であり、ともすれば社会経済的な影響も含めた安全性への慎重な配慮が疎かにされがちなだけに、公的研究機関とそれを支援する行政の研究開発政策の役割は、公共性のある科学・技術の研究開発・利用を担保する上で極めて大きいといえる。実際、日本でも地方の農業試験所では、地域の環境などに適合した品種改良を農家とともに取り組んでいるそうであり、今後はそういう地道だが本質的に重要な努力に積極的に光をあてていくことが大切だろう。

なお以上では、会議の成功点を主に論じてきたが、今後の展開も含めて問題点がまったくないわけではない。問題点の評価も含めた総合的な評価は、昨年度より筆者も含めて神戸大学国際文化学部スタッフを中心にすすめられている科研費研究プロジェクトによる追跡調査・研究で明らかにしていきたい。

また2月5日に開かれたSTAFF主催のシンポジウム『テクノロジー・アセスメントへの市民参加を考える』の若干の感想も含めた最新版の報告は、英文ながら小生のホームページ(<http://www.cs.kyoto-wu.ac.jp/~hirakawa/>)で公開している。

●編集委員からのお願い●

会員の皆様には、各種情報をお寄せくださるようお願いいたします。特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局 <office@stsnj.org>宛あるいは skasuga@mars.dti.ne.jp

までお送りくださいますようお願い申し上げます。

<編集委員・春日 匠>

STSNJメーリングリスト

のお知らせ

STSNJ Network Japanでは、会員のみ参加いただけるSTSNJメーリングリストをご用意しています。

情報交換や議論に、幅広くご利用ください。

登録を希望されるかたは、事前に登録してあるアドレスで、事務局 <office@stsnj.org>までメールをお送りください。会員の方であるか確認ののち、手動で登録いたします（しばらくお時間をいただくこともあります）。

また、登録メールアドレスの変更は事務局 <office@stsnj.org>までお願いいたします。

一高校理科教員としてのSTS

八巻俊憲 福島県立須賀川高等学校

ここ数十年間の間に、STSが生まれ、一定の発展を見た。STS N.J.を通してその発展の一面をかきまみることができ、科学についての客観的な知見や科学技術文明の背景についての理解が深まり、理科教師としてのアイデンティティの追究に大変役立っている。

N.J.の会員になってから約十年を経たのを機に、これまでSTSから得たものについて私見を述べてみたい。

始めに以下の論旨の前提として、筆者の受けた学校教育について述べておきたい。

まず、高等学校で学んだ理数科のカリキュラムには「世界史」がなかった。大学受験にとって邪魔な文系の科目を排除したためであることはほぼ明白だが、「世界史」が理科＝西洋科学を学ぶ基盤となる知識を与えるものとしてはまったく認識されていなかったことが伺える。従ってこれまで得た世界史の知識は、中学校での限られたものと、一般の歴史書で読みかじったものしかない。大学初年の教養部で履修した「世界史」の講義の内容は、教官の好みによって、東洋史の、しかもアヘン戦争に関する部分だけだった。

また、高校には西洋思想史を扱う「倫理」の単位があったが、これは「日本史」の授業に振り替えられてしまったため、西洋哲学の基礎にもほとんど触れなかったことになる。悔し紛れに言えば、その分、西洋中心の歴史観からは解放されたというメリットはあるが。

筆者は大学は理学部ではなく工学部に進んだので、理学部や教育学部出身者が通常と思われる一般の理科教員とは、視点にややずれがあるかも知れない。それがSTSに関わる原因の一部になったかも知れない。しかし、理科教師が科学についての歴史的あるいは社会学的視点に疎いという点については、理学部や教育学部を出てもそうは変わらないのではあるまいか。

因みに、教員養成課程の選択科目の中に「科学史」1単位があって興味半分に履修したが、理学部の教室で行われたその授業の内容は、ある科学哲学者のドイツ語原文の一部を読むというもので、科学史のなんたるかや、科学哲学との関係、なぜそのような授業が科学史の授業なのかもわからないまま終わった。それも必修科目ではないので、履修した学生はほんの一部であった。

これらのことは、高校に限らず、科学教育に携わる者の多くが、科学論と呼ばれる領域の知見にほとんどまったく触れずに科学を教える立場になっていることを意味している。

したがって筆者も、STSに出会うまで、理科教育の対象である科学とはいったい何であるのか、理科教師とはいったい何者であるのかについて考えたことがなかった。理科教育の研究会の場などでも、そのようなことが話題になった経験はまったくない。これは、科学そのものを客観化した視点をもつ科学論という道具を持たないためであることはほぼ明らかだ。

さて、筆者を含めほとんどの教師が理科教員になった動機として考えられるのは、自然や科学が好きであるとか、学校の理数系の教科科目が得意であった、といった個人的なものであり、今少し公的な使命感に基づく動機があるとすれば、そのようなすばらしい自然や科学の知識を後進に共有させたいといったことであろう。それ以外の理由で、たとえば科学技術文明はこのままでは立ち行かないから、新しい科学観を普及させるために理科の教員になった、などというケースは考えにくい。むしろ科学が、人間の最も純粋な精神活動である真理追求の究極の形であり、それを子どもたちに教えることは疑問の余地のない善であり、そのような善行に身を捧げ、自然と科学の魅力を伝える伝道師になることは、神の愛を教える宗教の伝道師になるのと同じく、使命感と満足感と優越感を満たすべきものであったろう。

このような理科教師にとって、かのマートンの5つの規範＝CUDOS（公有性、普遍性、無私性、独創性、懐疑主義；ここではザイマン¹⁾に従って、4つではなく5つの規範説を採った）は、科学の理想を表す徳目として自然に受け入れられるだろう。CUDOSは、誰もが理科を習う際に、直接ではないにせよ、漠然とながら科学の輝かしい特徴として刷り込まれた基本的イメージではなかったろうか。

しかし、この半世紀に科学技術の状況は一変した。そしてSTSは、科学技術のイメージを一変させた。20世紀前半の科学のイメージたぶん多くの理科教師が共有している一と、後半の科学のあり方の中には大きなギャップができた。

世界史を習っていない筆者にとって、科学史は、過去の科学のイメージをも変えた。村上陽一郎氏の提唱する「聖俗革命」は、神学の側において「聖」の衣をまとっていた「前科学」が還俗して「科学」となった意と解釈できるが、むしろ日本人の立場から見れば、ある意味で俗化してしまった「神」の知から離れて新たな「聖」なる知である「科学」が生まれたのだともとれる。そのように考えられてきたことは、明治維新以降、富国強兵や経済成長のために科学が一貫して用いられてきた政治的な思惑とは別に、学校教育ではかなりの程度価値中立的・絶対的な知のあり方として科学を教えるスタンスが維持され続けてきた史実²⁾からも言えると思う。

ところが20世紀後半、その「聖」なる科学は「俗」化の一途を辿ってきた。例えばマンハッタン計画以後、もっとも純粋で「聖」なるはずの原子論研究の成果が、あっという間にその後の人類の喉元に突きつけ続ける刃と化した。その後の冷戦体制が、子どもの夢をかきたてる宇宙開発技術の発端となったり、エレクトロニクスをはじめ商業的にはアメニティ実現を標榜する技術のほとんどが、戦争兵器技術開発の副産物であったなどということが小中学校や高校の段階で知らされていたら、現在の科学者や技術者、理科教師は同じ進路をたどったであろうか？

それから数十年間、科学は高度経済成長を支えてきた一

方で、問題をまき散らし、環境に対する負担を蓄積していった。それでもまだ、「一般市民」—この言葉は、科学によって知識やモノを生産する立場にはない理科教師と同時に自分の専門分野以外の問題に関する他の専門家も含むから、常にほとんどの市民のことである—は、「専門家」を基本的に信頼し期待していた。

しかし、専門家が、そして真実すなわち誠実の本来であるはずの科学知識が、素人目にも明らかな問題に無力で、結果的に体制の側に有利にはたらく政治性をおびていることが次第に明らかになった。それを劇的に示したのが、「水俣病」であった。しかし現在、高校社会科—文系科目とされる—で教えられる「水俣病」の教科書に、科学論の知見がいくらかでも反映されているだろうか。

さらに、20世紀も終盤の1995年には、一カルト教団が、科学エリートを取り込んで科学知識を悪用するという事件が起こった。政府レベルならすでに行ってきたプロセスを私的に適用しただけともいえないこともないこの例を見ると、宗教団体とはいいながら異常に「俗」化した集団であるこのカルトと、科学がいとも簡単に結びついてしまったことから、科学の「俗」化は頂点に達したといえるのではないか。

この後にも、ヒトゲノムの解読結果を特許化するという、公有性や無私性に反して科学知識を私有化する動きがアメリカから生じるなど、世界における科学のCUDOS (kudos=栄誉) は完全に地に落ちてしまった。

これでは、科学を学ぶ生徒たちから見て、科学や技術の専門家たちも、テレビの視聴者の目を奪う「超能力者」や、詐欺師が横行する金融や経済の実業家たちとさして変わらないことになってしまう。

こうしてマートンの規範は、単に実際には存在するかどうかわからない理想のアイドル科学者像のキャッチコピーとなってしまった。通常、中等教育の進路指導の場では、生徒が、歌手やタレントなどのアイドルを志向した場合、もっとよく現実を見るべきだとたしなめるのが常であることと比較すると、理科の教師が実現性の薄い科学のアイドル像だけを伝えたとしたら問題があったことになる。その結果社会に対してあまりにも無関心な科学者が育ったかも知れないからである。そうだとすれば、現行の学習指導要領では必須科目ともなっている世界史を欠いた理数科のカリキュラムは、大学進学率追求という社会的圧力の中で、科学を担う立場に立つ人間の教養を後退させてきた一例ということになる。

現在、中等教育における理科は、以前と違った意味での教養の一部となっている。日本は明治維新以来、実学の原動力として科学を導入したが、同時にマートン的なエトスも自然に吸収した。しかし、それによって育てられた科学者は、結局政治にも資本主義にも、そして環境問題にも無力であった。ザイマンの提出した新しい規範=PLACE (所有的、局所的、権威主義的、受託的、専門的) は、科学活動がいかに社会に依存的であるか、科学者がいかに社会に対して主体性を欠いた存在かを示している。

そして理科教師も同様にまた社会に対して十分依存的、非主体的である確率が高い。半世紀前の科学の「神聖」なイメージがその原因だとすれば、科学がその光背を失った今、科学者も理科教師もその性向を独立的、主体的なそれに変えねばならない。科学や社会に対して、真の意味での客観的視点を持ちうる知的基盤を持たねばならない。STSは、その新しい基盤を構築するという役割を負っているのではないだろうか、というのが、現時点での一理科教師の観測である。

1) John Ziman "An introduction to science studies" p.86, Cambridge University Press, 1984

2) 吉本市「理科教育序説」(2部 わが国理科教育の歴史) 培風館、1967

◆◆STS情報◆◆

●●開催状況●●

●科学史・技術史の研究会「火曜日ゼミ」

「火曜日ゼミ（火ゼミ）」というのは、東工大の一室を借りて行われている科学史・技術史の研究会で、原則として毎週火曜日の午後に行われています。参加は自由です。

運営は東工大とは一応、独立の「火ゼミ運営委員会」が運営しています。

問い合わせ先：梶雅範

e-mail mkaji@aqu.bekkoame.ne.jp

電話03-5734-2270 FAX03-5734-2844

場所：東京工業大学（東京都目黒区大岡山2-12-1）

石川台4号館地下ゼミ室B02

時間：午後1時20分から

火ゼミ 2001年1月-3月の予定

- 1月9日 杉山滋郎「再考：科学者たちのローマ字運動」
- 1月16日 中島秀人「アメリカにおけるSTSの動向」
- 1月23日 中村邦光「日本における火・熱の概念」
- 1月30日 休み
- 2月6日 末永昌久「アルカリ法と年次報告書（仮題）」
- 2月13日 梶雅範「メンデレーエフの周期律発見のロシアでの受容（仮題）」
- 2月20日 篠田真理子「天然記念物制度の歴史と自然誌研究」
- 2月27日 高山進「日米のエコシステム管理における科学と科学者の関与形態」
- 3月6日 「夏の合宿の打ち合わせ（予定）」

●科学・技術と社会の会のご案内

123rd

日時：2000年11月16日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：東京大学社会科学研究所 1F 中会議室

話題提供者：青野由利氏（毎日新聞科学部）

テーマ：「英国におけるヒト遺伝子解析と政策決定」

124th

日時：2000年12月22日（金） 6:00PM～8:00PM

場所：東京大学社会科学研究所 1F 大会議室

話題提供者：木場隆夫氏（総合研究開発機構）

テーマ：

「日本におけるコンセンサス会議の展開と変容」

*月例会終了後忘年会を行う予定です。こちらもふるってご参加ください。

125th

日時：2001年1月25日（木） 6:00PM～8:00PM

場所：東京大学社会科学研究所 1F 大会議室

話題提供者：春日匠氏（京都大学）

テーマ：「大学の理念と制度」

—市場主義批判と知の共同体の再興をめざして—

* 2000年度年会費3000円の納入をお願い申し上げます。年会費を納入された会員の方には、年報『科学・技術・社会』第9巻を送料無料で出版社より直接お手元にお送りさせていただきます。（郵便振替口座：加入者名 JASTS口座番号：00200-6-5694）

*入会ご希望の方は、下記事務局まで、お名前、住所、電子メール・アドレス、所属、関心領域をお寄せください。転居なさった場合も、事務局へご連絡ください。

・科学・技術と社会の会 事務局

柿原 泰 E-mail: kakihara.yasushi@nifty.ne.jp

●東工大中島研究室公開セミナー

「先端科学技術と社会」第41回研究会

日時：2000年12月1日（金） 16：30～18：30

会場：久米美術館7F会議室

発表者：綾野博之（東京都立短期大学非常勤講師）

内容：『アメリカのバイオエシックスについて』

事務連絡担当：梶田（久米美術館）

Tel.03-3491-1510 Fax.03-3491-6617

E-mail ricca@t3.rim.or.jp

「先端科学技術と社会」第42回研究会

例会の第42回は、インターネットを利用して三宅島の噴火災害支援を展開されている生田先生に、体験を交えながらお話しいただきます。大変の興味深いお話がうかがえると思いますので、ふるってご参加ください。なお、終了後に恒例の懇親会を開催いたします。

日時：2001年1月26日（金） 18：30-21：00

会場：東京工業大学大岡山キャンパス

百年記念館・第5会議室

発表者：生田茂（東京都立大学・工学系研究科教授）

内容：地域コミュニティと大学

—新しい大学像を目指して—

世話人：

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島秀人・水沢光

東京大学先端科学技術研究センター 大谷卓史

連絡先：〒152-8552 目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島研究室

tel/fax 03-5734-3255

e-mail nakajima@mail.me.titech.ac.jp

●シンポジウム『テクノロジー・アセスメントへの市民の参加を考える』—「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」を振り返って—

平成12年、市民参加型のテクノロジー・アセスメントの一つの手法であるコンセンサス会議が、我が国では初めて公的機関が関与して、遺伝子組換え農作物をテーマに実施されました。

そこで、今回の「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」を振り返るとともに、テクノロジー・アセスメ

ントへの市民の参加、遺伝子組換え農作物についての市民と関係者との双方向のコミュニケーション等をテーマとしたシンポジウムを開催します。

日時：平成13年2月5日（月）13:30～17:00

会場：発明会館 大ホール

主催：（社）農林水産先端技術産業振興センター

後援：農林水産省

プログラム

13:35 1. コンセンサス会議と科学技術への市民参加
若松征男氏(東京電機大学教授、

科学技術への市民参加を考える会(AJCOST)代表)

14:00 2. 「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」を振り返って

(1) 科学論の立場から 小林傳司氏 (南山大学教授)

(2) 自然科学の立場から 駒嶺穆氏 (財団法人進化生物学研究所理事、東北大学名誉教授)

(3) 参加者の立場から (1) 野本俊雄氏 (市民パネル)

(4) 参加者の立場から (2) 坂本京子氏 (市民パネル)

15:30 パネルディスカッション

司会：高柳雄一氏 (NHK解説委員)

パネラー：上記講師5人、農林水産省

参加費：無料

問合せ先：（社）農林水産先端技術産業振興センター

担当：鈴木、平野

〒107-0052東京都港区赤坂1-9-13三会堂ビル7F

TEL 03-3586-8644,FAX 03-3586-8277

ホームページ：http://web.staff.or.jp/

●Cultural Studies Forum (CSF)

10月例会

日時：10月28日（土） 4:00～

会場：明治学院大学本館5階1552番ゼミ教室

タイトル：「文化としての生殖技術

：医師と患者の技術の選択要因とライフドキュメント」

発表者：柘植あづみ（明治学院大学助教授・医療社会学）

ディスカッサント：澁谷智子（東京大学・院・比較文化）

<発表概要>

『文化としての生殖技術』と岩波の思想2月号の「生殖技術と女性の身体の間」に未発表のデータを加え、技術を用いるか否かの意思決定がどのような要因（経験・情報・人間関係・価値観等）から行われているのかを、医師と患者の人生経験とそこから形成された（と思われる）価値意識との関係について検討する。

11月例会

発表：科学技術への批判的関与と新たなテクノクラシーの形態 - 「科学のカルチュラル・スタディーズ」から考える -

発表者：柿原泰（日本学術振興会・東京大学、科学技術史／STS)

ディスカッサント：平川秀幸（京都女子大学、科学論／科学のカルチュラル・スタディーズ）

日時：11月25日（土） 2：30～

会場：一橋大学 磯野研究館 1階小集会室

●「湘南科学史懇話会」

・2000年12月23日（土）午後2：00～5：30

・神奈川県立「かながわ女性センター」特別会議室
藤沢市江ノ島 電話046-627-2111（代表）

・佐々木力氏

「新デンマーク国の話ー『科学技術と現代政治』遺聞」

・懇話会終了後、懇親会（参加自由）を実施します。

・2001年2月11日（日）午後1：00～5：00

・神奈川県立「かながわ女性センター」特別会議

藤沢市江ノ島1-11-1 電話046-627-2111（代表）

・新戸雅章

「わがテスラ・・・エジソンを超えた発明家の真実」

・連絡先：猪野修治（事務局）

神奈川県大和市渋谷3-4-1

TEL:046-269-8210 FAX:046-269-8213

●「旧ソ連における原子力開発の歴史と現状」

ユーラシア研究所 定例研究会

日時：2000年12月22日(金) 17:00-

場所：日ソ会館・201号室/202号室

講師：梶雅範：東京工業大学、藤井晴雄：海外電力調査会

問い合わせ先：ユーラシア研究所

〒156-0052 東京都世田谷区経堂1-11-2

tel/fax.03-5477-7612

E-mail yuken@t3.rim.or.jp

●科学知識が構築される「過程」の分析の可能性：英国の「科学知識の社会学」の談話分析の発展の流れと現状

日時 12月18日（月曜日）午後3時より

場所 国立国語研究所 1号館4階の相談室

話題提供 武者小路澄子さん（図書館情報大学）

題目 科学知識が構築される「過程」の分析の可能性：英国の「科学知識の社会学」の談話分析の発展の流れと現状

●●文献情報●●

●すでに新聞報道でご存じのことと存じますが、金森さんの『サイエンス・ウォーズ』がサントリー学芸賞の思想・哲学部門の賞を受賞されました。おめでとうございます。

ご本人もすでに公開されていることなので追加しますと、金森さんは4月から東大 教育学部に転任されるそうです。重ね重ねお祝い申し上げます。(中島氏より)

●立花隆の仕事について、以下の本が出ました。

『立花隆の無知蒙昧を衝く：遺伝子問題から宇宙論まで』、社会評論社、2000年9月30日 (¥1800)

著者は京大の名誉教授で佐藤進という方です。内容は、まさしくタイトルのとおり。けっこう、舌鋒鋭いです。

ちなみに、あとがきには、

「・・・『脳を鍛える』という本は多く売れたという。にもかかわらず、誰ひとりこの本を批判する人がでてこないということに、首を傾げ(ママ)ざるをえない。これは、日本人の理系離れどころか、知的頹廢を示すものであろう。・・・私は理系の人間である。・・・しかしそれでもなお、私は一連の立花隆の本・論文に批判を加えたのち、物理関係については、数理物理学・宇宙論を専門にしている研究者に見て貰った。・・・立花隆の文章を読んでいると、その(専門家にチェックを依頼した：塚原注)形跡はない。専門家がチェックをしていたら、こんな間違い、データラメを見逃すはずがないからである。立花隆は、人間としての謙虚ささえ忘れてしまったようだ。」

うーん、科学ジャーナリズムの問題、もしくは、科学論の応用問題でしょうか？ (塚原氏より)

●『リスク学事典』

日本リスク研究学会編

TBSブリタニカ

B5変形 / 375p

4-484-00407-0

2000.9

本体価格：¥8,500

●フランス大学出版PUFから出版されている季刊雑誌

Cites : Philosophie, Politique, Histoireの最新号(vol.4, 2000)が、「よりよい世界によろこせ！ 主要な技術リスクについて」というタイトルのもと、リスク論の特集を組んでいます。

特集部の目次は以下のとおり。(ちなみに、アクサン他は省いています)

1. 論点：よりよい世界によろこせ！ 主要な技術リスクについて

Luc Foisneau, 導入：リスクの政治

Dominique Lecourt, テクノフォビア

Marc Peschanski, バイオ・テクノロジー産業に恐怖を抱くべきなのか？

Raphael Larrer, GMO、根っからの敵意と予防原則

Frederic Worms, 保護のもとに：人間の本性？

Celine Lafontaine, ポスト・ヒューマニズムのサイバネティクス・マトリクス

Bertrand Munier, リスク管理、ヨーロッパ社会の新たな英知？

Daniel Boy, 食品の安全性：食べるのは危険なのか？

2. インタビュー

公共政策と食品の安全性 Martin Hirsch(フランス食品衛生安全局局長)とのインタビュー

インタビューアー Luc Foisneau

3. 討論

Emmanuel Picavet, クオリティー・オブ・ライフというコンセプト(欲求、心理的充足と選択能力のはざままで)

Daniel Benamouzig, 「公衆衛生におけるクオリティー・オブ・ライフの測定」の社会的諸機能

Joel Coste, 公衆衛生と結びついたクオリティー・オブ・ライフというコンセプトと方策が表象するもの、意味するもの

Pierre Demeulenaere, 公衆衛生と結びついたクオリティー・オブ・ライフという主題の登場

Alain Leplege, 医学的決定のエピステモロジー：クオリティー・オブ・ライフ測定の寄与

5. 動向

Lino Rizzi, 民主的正統性、コンセンサス、メディア・コントロール

(中村氏より)

●ハーバードのブックショップで異色のブックレットを見つけました。あまりにおもしろいので、3時間ほどで全部読んでしまった。まだ出たてのようで、アメリカ人研究者も誰も知りませんでした。

Ziauddin Sardar, Postmodern Encounters Thomas Kuhn and the Science Wars

(Icon books, UK, Totem Books, USA, 約500円), ISBN1-84046-136-5

おー、わしがいいかったのはこれじゃ、という感じの本でした。ぜひ読んでみて。

(中島氏より)

●岩波書店の雑誌「科学」2000年12月号に、私の原稿が掲載されました。

〈連続特集■なぜ、(自然科学を)学ぶのか〉に応募したもので、

「“科学はどのようなものか”が、わかるように学ぶ」というものです。

(塩川氏より)

●日本経済新聞(2001年1月18日)の1面の技術創世紀の欄に「変化の波はあらゆる人に押し寄せる。専門家任せではいられない」という記事が載っています。

遺伝子組換え農作物のコンセンサス会議のことや若松先

生のコメントがあります。
(前島氏より)

●●ウェブサイト●●

●神戸大に非常勤で行ったとき、塚原さんとこの学生さんに教えてもらった下記のサイト、一見の価値アリです。
遺伝子組み換え食品報道検証委員会
<http://www.gmomedia.com/>

「専門家10名で構成」とは書いてあるものの、記事にも氏名は一切出ていないあたりからしてとっても怪しいのですが、その文面を見るや「こいつらの真の目的は実はアンチ遺伝子組み換え食品キャンペーンなんじゃないか」と思えてしまいます(笑)
(平川氏より)

●学術審議会の2000/11 答申「人文・社会科学研究及び統合的研究の推進方策について(審議のまとめ)」の中に「二. 科学技術そのものを各分野協働して研究するプロジェクトの支援: いわゆる”STS”(Science, Technology and Society: 科学技術と社会、あるいは Science and Technology Studies) 等のプロジェクト研究の支援」とあります。

さて、この答申の持つ意味はどんなものなんでしょうかねえ. . . 。
ご覧になりたい方は
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/index.htm
の学術審議会をご参照ください。
(松原氏より)

●「科学史研究への問い」(東大科学史・科学哲学OB会会報掲載)
<http://member.nifty.ne.jp/nmasaki/katetu00.html>
この原稿は、科学史研究のあり方について、最近、感じてることをまとめたものです。こういう主張を、ほかの人たち、とくに科学史をやってる人たちがどう受け取るのか、非常に興味があるところです。(中村氏より)

会費納入について

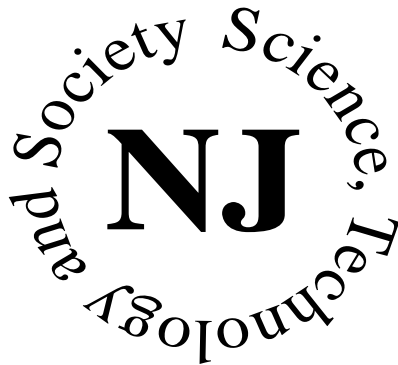
このニューズレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「99,00未」と「00未」は、それぞれ該当年の会費(3500円)が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後Newsletterの発送を中止します。

「00不足」は、お支払いいただいている会費が3500円には不足しているもので、「不足」の後の数時が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1年間ですので、送付が始まって1年以内に入会の手続きをとられなければ、以後Newsletterの送付を停止させていただきます。



編集後記

シンポジウムのお知らせのタイミングなどもあって、ちょっとやっつけ仕事になってしまいましたが、21世紀最初のニュースレターをお送りします。

大学改革シンポジウムについては、内部でいろいろと方針が定まらず、延び延びになっておりましたが、それだけに内容の濃いものになるかと思えます。

ぜひ、いまから予定を調整して置いてください。

ウェブサイトのほうにも、そのためのリンク集をつくっておきましたので、予習もできます（笑）。

<http://stsnj.org/nj/link/univ.html>

Newsletter Vol.11, No.3 (通巻No.40)
2001年02月15日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter編集委員会

代表 隠岐 さや香/委員 春日 匠

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 隠岐 さや香

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科

広域システム科学系

藤垣裕子研究室気付

FAX:03-5454-6990

E-mail: office@stsnj.org

WebSite: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 3,500円)